

が思い出される。

## シベリア回顧録

東京都 北見輝夫

### 一、終戦時、收容所名、その他

昭和二十(一九四五)年一月新発田十六連隊入隊、一週間後、北朝鮮会寧三部隊川口隊、第二重機関銃。中根小隊配属、会寧飛行場(飛行機はほとんど木製)防空、付近の学校屋上勤務、ソ連参戦で陣地構築、部隊復帰。終戦、工兵隊自爆陣地構築で派遣された工兵隊の伍長が言っていた。

兵器集結「囃們」。部隊集結のため囃們―延吉まで行軍、お腹を壊し、ふらふら歩き落伍する人々たちを、カンボーイが銃で小突く。途中唯一の楽しみは、歩きながら煙草の葉を取り、飯盒の中蓋に塩漬けにして葉巻煙草を作ることであった。古年兵が教えてくれた。

延吉―コムソモリスクまで貨車、ここからエバロンまでトラック、着いた所が三年半も住むことになった、三〇一收容所。

### 二、收容所と主な作業内容

三〇一收容所、伐採、土木、文化サークル。

伐採、特に寒中は事故が多く、隣の三一〇では半数以上が事故で、オカになったようだ。丸太切(二人鋸)、斉藤鶴松君(没)と気が合ってよくやった。

土木、穴掘り、これが難しく、やるとスリ鉢底になってノルマならず。修正してくれたのが石塚一正君(佐渡郡金井町、竹馬の友同級生)、現在も農業で頑張っている。彼には今でも感謝している。

大工、これは好きだったので楽しかった。エバロン駅舎、建築の時、藤野一正(エンジニア)、星野菊太郎(宮大工)両氏にお世話になりました。

立川正衛さん（刃物研磨担当の人）、お世話になりました。

文化サークル、壁新聞、新潮劇団、飯島さん（没）、木下さん（没）、野村先生（没）、松原さん（没）、皆さんにお世話になり有り難うございました。亡くなられた皆様のご冥福を心からお祈り申し上げます。

三、収容所からダモイ、日本上陸までの概況  
昭和二十四年一月、エバロン三〇一収容所は閉鎖することになり全員五百余名コムソモリスク第六分所に転勤。ここでは主に大作業で、田中康夫さんたちと合流、約十カ月。ナホトカへ。

昭和二十四年十一月三日、待ちに待ち、夢にも見たダモイ。日本舞鶴港着。ソ連抑留生活四年三カ月。ご苦労様でした。万歳。

### 三〇一会・会員シベリア回顧

神奈川県 藤野 一 正

一、昭和十二（一九三七）年徴集の第一乙種兵、仲間は次々と召集を受けたというのに私が赤紙（召集令状）を受け取ったのは十六年の八月。それも地元の高崎で新潟県の新発田連隊でした。一週間も経ず玄界灘を越えて初めて外国の地を踏んだのは朝鮮半島の釜山港で、それから鉄路北に進み、満州国との国境を流れる豆満江の手前会寧が終着駅でした。陸軍七五連隊第二機関中隊第二大隊砲小隊に配属され猛訓練に明け暮れ、三年半過ぎ、そろそろ満期除隊と、指折り数えていたらとんでもない、部隊は一部補充員を残し戦友は勇躍激戦の続く南方戦線の出動。これから生死を共にと誓った戦友と一生の別れとなった。